

平和文化



2019. 8 No.201



公益財団法人 広島平和文化センター
Hiroshima Peace Culture Foundation

〒730-0811 広島市中区中島町1番2号

TEL (082) 241-5246 (代表) FAX (082) 542-7941 E-mail: p-soumu@pcf.city.hiroshima.jp

令和元年(2019年)8月/年3回発行 [URL] <http://www.pcf.city.hiroshima.jp/hpcf/>

本財団新理事長に 小泉崇元駐ブルガリア 共和国特命全権大使が就任

本年7月16日、元駐ブルガリア共和国特命全権大使の
小泉 崇^{こいずみ たかし}氏が本財団の10代目の理事長に就任しました。

【略歴】

昭和26年生まれ。東京教育大学文学部卒業。昭和51年、外務省入省。在米日本大使館・一等書記官、経済協力局開発協力課課長補佐、欧亜局中・東欧課課長補佐、経済協力局民間援助支援室首席事務官、大臣官房監察査察室首席事務官、在東ティモール日本大使館・参事官、国際協力局国際緊急援助室長、大臣官房地方連携推進室長、大臣官房福利厚生室長、ブルガリア共和国駐劄^{きゅう}日本国特命全権大使を経て、平成28年8月退職。



就任のあいさつ

この度、小溝泰義前理事長の後を受け、栄えある広島平和文化センターの理事長に就任いたしました小泉崇^{こいずみ やすよし}です。この「広島の平和を求める心」の原点であり、拠点ともいべきセンターの理事長という重責を担うことになり、大変光栄であるとともに身の引き締まる思いをしております。会長である松井市長のご指導の下に、その任を果たすべく全力を尽くしたいと考えております。

小溝前理事長は、広島の心、とりわけ被爆者の方々の思いを世界に伝え、核廃絶に向けた運動を前に進める上で顕著な貢献をされました。平和首長会議のメンバー都市の拡大やリーダー都市制度の創設、オバマ前米国大統領の広島訪問実現に向けての環境整備、核兵器禁止条約を実効的なものとするためのイニシアティブなど、その数々の実績は枚挙に暇がありません。私は小溝前理事長にその実力、見識においてとても及ぶものではありませんが、40年間の外交官としての経験・知見を活かし、核なき平和を求めて、文化・青年交流、国際的な交流を更に前に進め、センターの活動推進と発展に貢献していきたいと考えております。

私は40年間にわたる外交官生活の中で、如何に平和が大切であるかを実感してきました。共産主義国であった東欧のブルガリアに赴任した時期には東西冷戦と共産主義体制の崩壊を経験し、その後に転勤した米国では、直後に湾岸戦争が勃発。更に2000年代半ばに勤務した独立国もない東ティモールでは、再び内乱状態となり自宅周辺で銃撃戦が起こり身に危険が迫る事態にも遭遇しました。その後国連の平和維持活動(PKO)への支援にも参画し、ひとたび崩れた平和を立て直すことがいかに大変であるか、また、平和構築に国際社会が協力して取り組むことがいかに重要かを痛感する経験をいたしました。

なかでも広島及び核兵器廃絶についての思いに触れたいと思います。駐ブルガリア日本大使を務めていた2015年に、ひろしま・ブルガリア協会主催の「被爆70周年記念ヒロシマ・ナガサキ原爆展」で挨拶を行い、「核兵器がどれほど残酷で非人道的な兵器であるかは、唯一の被爆国である日本人が一番よく知っている。理由

目次

本財団新理事長に小泉崇元駐ブルガリア共和国特命全権大使が就任	①
2020年NPT再検討会議第3回準備委員会に合わせ平和首長会議が代表団を派遣	②
小溝事務総長が「2019カーネギー国際核政策会議」への出席等のため米国を訪問	④
被爆体験記「語り継ぎたい『空白の十年』」(清水弘士)	⑤
「広島・長崎講座」開設大学への支援／「新着資料展」／	
企画展「市民が描いた原爆の絵—記憶と向き合う—」	⑥
「収蔵資料の紹介」コーナー「ある一家の原爆」	
資料展「広島市中島本町53番地 大正屋呉服店」	⑦
海外からの来訪者が発信するメッセージ	⑧

「ヒロシマ・ガイド」／被爆体験証言者及び被爆体験伝承者への委嘱書交付式／	
被爆体験伝承者から	⑩
被爆体験記の朗読会にご参加ください	⑪
被爆体験記を多言語に翻訳、公開しています／被爆体験の継承にご協力を	⑫
外国人市民の日本語能力向上支援／「通訳ボランティア研修会」の開催	⑬
JICAサロン「ネパールってどんな国?」	
今年度のひろしま奨学金奨学生30人が決定	⑭
姉妹・友好都市を市民に紹介(テグ、ハノーバー)／	
広島市外国人市民の生活相談コーナー	⑮
「平和について思う」／ひろしま日本語教室と国際交流(光原鈴江)	⑯

の如何を問わず人類が二度と使ってはならない兵器である。」旨を述べ、松井市長のメッセージを引用して、「核兵器や戦争のない世界を希求している同市長の思いをブルガリアの人々とも共有したい。」旨を強調しました。更に、国立ソフィア大学で行った「戦後70周年記念講演会」でも、広島・長崎への原爆投下70周年に触れ、核兵器廃絶と平和主義の重要性を訴えて多大な反響を得るなど、累次の機会に平和と核廃絶に向けての思いをブルガリアの人々に伝える努力をしてまいりました。

最後に一点述べておきたいことがあります。それは、私自身が東京の近所にお住いのある被爆者の方に知己を得て個人的な交流の機会を持つことができたことです。その方は、数えて7歳の時に被爆し、一瞬の内に肉親10人を失う経験をされました。その後小学校を出ただけで大阪に丁稚奉公に出されて、それこそ筆舌に尽くせぬ苦勞をされ、今も原爆の後遺症に苦しめられていると伺いました。その被爆者の方の「原爆は絶対悪である」、「誰にも二度と同じ思いをさせてはならない」との強い訴えは、私の心を揺さぶり、センターの仕事に携わりたいという動機の一つとなりました。

昨今の国際情勢を見るに、明るさの兆しが見えた「核廃絶」を巡る状況は厳しさを増していると認めざるを得ません。しかしながら、私は「核廃絶」は必ずできると信じています。何故なら、「核兵器」は人間が作り出したものであるから、人間がこれを廃絶できないわけがないと思うからです。私たちは如何に困難であろうともその実現を絶対に諦めてはならないと思います。そのためには、市民社会の連帯の力が何より重要であり、民衆の声が時代を動かす力となることを信じます。そして、広島平和文化センター及び平和首長会議の役割がますます増してきていると思わざるを得ません。力のない私ですが、全力で任務に当たる所存ですので、皆様方のご理解とご協力をいただければ幸いに存じます。どうか宜しくお願いいたします。

(2019年7月16日)

2020年NPT再検討会議 第3回準備委員会に合わせ 平和首長会議が代表団を派遣

平和首長会議（会長 まついかずみ 松井一實広島市長）は、今年4月・5月、米国・ニューヨーク市で開催された2020年NPT（核兵器不拡散条約）再検討会議第3回準備委員会に合わせて代表団を派遣し、国連・各国政府関係者等に、核兵器廃絶に向けた被爆者の切なる願いを伝え、NPT第6条が規定する核軍縮の誠実交渉義務の遂行や核兵器禁止条約を推進することの重要性を訴えました。さらに、平和首長会議が市民社会の連帯を広げることにより、核兵器のない世界の実現を目指す為政者のリーダーシップを後押しする環境づくりを進めていくことを伝えました。また、平和首長会議主催に

よりユースフォーラム等を実施したほか、松井会長が国連国際学校で講演を行いました。

4月29日（月）

中満国連事務次長兼軍縮担当上級代表は、同準備委員会の開会挨拶で、来年はNPT発効50年を迎えることに触れ、核兵器を巡る状況は厳しいが、当事国による誠実な対話と交渉により、バランスの取れた安定的な平和をもたらすNPT体制の構築が重要であると述べられました。

代表団は会議を傍聴した後、たかみ ざわ 高見澤軍縮会議日本政府代表部特命全権大使と面会し、松井会長、田上富久副会長（長崎市長）からサイド準備委員会議長たうえとみひさの被爆地訪問の働き掛けをお願いしたほか、こみやすよし 小溝泰義事務総長（本財団理事長）が米国内の州・市議会で核兵器廃絶に向けた決議採択の動きがあることを紹介しました。

続いて、リドル軍縮会議英国政府代表部大使との面会では、松井会長は、他の国も英国のように透明性や対話を重視する姿勢を持てば意見はまとまっていくので、被爆者の強い思いを受け止め、他の核保有国をリードして、核兵器廃絶に向けて歩みを進めてほしいと依頼しました。

4月30日（火）

最初に、ハイノツィ オーストリア外務省軍縮局長と面会し、松井会長は、核保有国における平和首長会議加盟都市を増やし、市民社会の核兵器廃絶に向けた気運を醸成することが重要であり、特に若い世代の意識高揚に取り組みたいとの考えを述べました。

続いて、広島から派遣した「核兵器禁止条約」の早期締結を求める署名活動に従事している高校生8人と共に国連国際学校を訪問しました。

松井会長は、約130人の高校2年生を対象に講演を行い、被爆の実相と被爆者の思いを伝えるとともに、国家は自国の利益追求を優先する中で核抑止に依存する考え方をなかなか変えられないかもしれないが、人類が平和に暮らし続けられるように地球を持続可能なものとするためには核兵器はいらないのだという認識を世界の市民社会において広げていくことが重要であると訴えました。また、松井会長の講演後、派遣高校生も、同校の1年生約40人を前に自らの平和活動について発表するとともに、若者として平和な世界を築くために何ができるか等について活発なグループディスカッションを行いました。

その後、派遣高校生と共に中満上級代表を訪ね、松井会長が派遣高校生の活動について紹介した後、高校生代表から上級代表に約12万筆分の署名目録を手交しました。続く上級代表との意見交換の場で、松井会長は、市民が安心、安全に暮らせるよう責任を担う市長の組織である平和首長会議として、広島・長崎の経験を二度と繰り返さないために「持続可能な地球」というテーマを設定して活動していきたいと説明しました。また、被爆の実相を伝えるべく平和記念資料館のり

ニューアル等、展示内容の充実に取り組んでおり、多くの人に見てもらうことで世論醸成につなげたいと述べました。

続いて、ヒギー軍縮会議ニュージーランド政府代表部大使と面会した松井会長は、今後も周辺国と共に核兵器禁止条約の批准を進めていくための取組を進め、批准国を増やしてほしいと依頼しました。大使は、今後も市民社会の活動に期待していると述べられました。

5月1日(水)

松井会長は田上副会長と共に、被爆地の市長として準備委員会のNGOセッションで発言し、平和首長会議は被爆者の切実な願いを受け止め、世界中のパートナーと為政者を後押しする環境づくりを進めていくとの決意を表明し、核保有国を含む全ての国が真剣に対話し、知恵を出し合い、対決的安全保障を協調的安全保障に転換するための為政者のイニシアティブを要請すると訴えました。



NGO セッションでスピーチする松井会長（左）と田上副会長

続いて、P S R（社会的責任のための医師の会）と協働するS G I（創価学会インターナショナル）広報担当ディレクターのホール氏との面会で、松井会長は、平和首長会議は核保有国で加盟都市を増やし、政府に軍縮を働き掛ける世論を醸成したいと考えており、首都であるワシントンD.C.の加盟に向け、協力してほしいと依頼しました。

その後に面会したサイド準備委員会議長は、合意を形成し来年の再検討会議に臨めるよう勧告案を作成するとの意向を示し、「核軍縮の推進について市民社会、特に若者の賛同を得ていきたい、世論の醸成に向けた市民社会の果たす役割に期待する」と述べられました。松井会長は、平和首長会議は被爆者の思いを大切にしながら、市民に直接向き合い、次世代のために持続可能な地球を残すため活動していると説明し、「来年に向けてそれぞれの国が他国のことも考慮した判断をしつつ、全体として調和のとれた、俯瞰的な視点で捉えた内容でまとまるよう期待している」と述べました。

さらに、松井会長はニューヨーク広島会のメンバーと面会し、同会がニューヨークでヒロシマの心を広く発信する活動を行ってくださっていることに感謝の意を伝えるとともに、「市民が平和な生活を送れるようにすることを第一に考えて市政を進めており、市民にも皆が平和な生活を築き、継続していくために自分はどうあるべきか考えるという視点を持っていただけるよう平和行政を進めていきたい」と述べました。

5月2日(木)

準備委員会のサイドイベントとして平和首長会議主催ユースフォーラムを実施し、派遣高校生のほか、ナガサキ・ユース代表団や平和関連のNGOで活動する世界の青少年が、自分たちの活動内容や平和への思いについて発表するとともに意見交換を行いました。

続いて、米国のリーダー都市であるデモイン市のカウニー市長等と共に、デブラシオ ニューヨーク市長と面会しました。カウニー市長は、全米市長会議において13年連続で核兵器廃絶と平和首長会議の取組についての賛同決議が採択されていること、ワシントンD.C.等の市議会が米国政府に核兵器禁止条約に署名するよう求める決議が採択されたこと等を紹介しながら、人々の生活を守る市長の組織である平和首長会議と連帯して一緒に活動しようと、加盟を呼び掛けました。



平和首長会議主催ユースフォーラムの参加者と一緒に

5月3日(金)

平和首長会議役員都市意見交換会を実施し、役員都市5都市が集まったほか、スカイプを通じて1都市が参加し、平和首長会議が目標の一つとして掲げている「安全で活力ある都市の実現」に向けた活動をそれぞれの都市が発表しました。松井会長は、「市民の住む土地で、いかに安心、安全を確保するかが大事であり、核なき世界を目指して、多様な価値観を認め合いながら、今後も各都市のさまざまな施策を持ち寄って取組を進めよう」と述べました。

続いて、ディスラプター・アワード授賞式に出席しました。ディスラプター・アワードは、米国の財団が社会的な問題解決に取り組む個人や団体を顕彰する賞であり、その賞の中で特に核兵器廃絶と世界平和の分野の貢献を称えるために昨年創設されたハーシー・プライズが平和首長会議に授与されました。授賞式で松井会長は、受賞の挨拶を述べた後、「これで核抑止の考え方を叩き壊そう！」と、ハンマーをかたどった賞のトロフィーを振り下ろし、広島から持参した千羽鶴を希望のシンボルとして紹介し、大きな拍手を得ました。

4月30日(火)～5月3日(金)

準備委員会の会場となった国連本部内で、会議に参加した方々に被爆の実相についての理解を深めてもら

うため、平和首長会議原爆ポスター展を実施しました。

なお、平和首長会議は、NPT発効から50周年という歴史的な節目に開催される来年のNPT再検討会議に対する期待を込め、全ての締約国が本条約の基本的な目標と目的に関する共通の基盤を拡大するために、相違点を乗り越えて真剣に対話し、具体的な核軍縮・不拡散措置を確実に進展させるための創造的な解決策を生み出すよう求める共同アピールを、準備委員会最終日の5月10日（金）に、ジャックリーン・カバッソ本財団専門委員からサイド準備委員会議長に手交するとともに、議場で各国政府代表に配付しました。また、国連事務総長や全ての国連加盟国宛に本アピールを発出するとともに、平和首長会議全加盟都市に対し、このアピールを各国政府や市民社会に広く伝えてもらうことを依頼しました。

（平和首長会議・2020ビジョン推進課）

小溝事務総長が「2019カーネギー国際核政策会議」への出席等のため米国を訪問

小溝泰義平和首長会議事務総長（本財団理事長）は、3月5日（火）から14日（木）までの日程で米国を訪問し、カリフォルニア州の加盟都市市長や核軍縮に携わるNGO関係者等と面会するとともに、ワシントンD.C.で開催されたカーネギー国際平和財団主催の核政策に関する国際会議に出席しました。

カリフォルニア州訪問

小溝事務総長はカリフォルニア州を訪れ、加盟都市のオークランド市長、ロサンゼルス市長、サンタ・バーバラ市長、サンフランシスコ市国際部長と面会し、西海岸での平和首長会議の活動の活性化や米国のリーダー都市であるデモイン市との協力関係の強化を要請するとともに、引き続き連携していくことを確認しました。

オークランド市長は加盟要請への協力を積極的な姿勢を示され、ロサンゼルス市



オークランド市長との面会



ロサンゼルス市長との面会

長は、米国のSDGs（国連の持続可能な開発目標）リーダーとして環境問題等への取組を推進していることを紹介し、被爆樹木の取組への協力に積極的な姿勢を示されま

した。また、サンタ・バーバラ市長は環境破壊や平和問題に更に目を向けていきたいと述べられました。

そのほか、前カリフォルニア州知事、スタンフォード大学教授、在サンフランシスコ日本国総領事等とも面会し、平和首長会議が世界恒久平和への道筋として「核兵器のない世界の実現」と「安全で活力のある都市の実現」の二つに取り組んでいることなどを紹介しました。

さらに、昨年米国内の複数の都市が核兵器廃絶に向けた決議を採択する原動力となったPSR（社会的責任のための医師の会）の、ロサンゼルス支部主催の講演会などに登壇し、平和な世界に向けて、多様性を認め、協調しながら対話していくことの重要性などを訴え、平和に向けた取組の推進を呼び掛けました。

2019カーネギー国際核政策会議への出席

小溝事務総長は、ワシントンD.C.で開催された「2019カーネギー国際核政策会議」に出席しました。この会議は、米国の有力シンクタンクであるカーネギー国際平和財団が2年に一度開催する国際会議で、外交官、研究者、専門家らが一堂に会して、国際社会が直面している核兵器・核エネルギー等に関する課題を議論し、その解決策を探るものです。



カーネギー国際核政策会議のパネルディスカッション

小溝事務総長は、今後2年間の核軍縮・核不拡散を巡る世界の状況を予測するセッションにパネリストとして登壇し、世界45か国から集まった約800人を前に、被爆者のメッセージや平和首長会議の取組について紹介しました。また、核兵器のない世界の実現に向けて自治体が果たす役割について強調するとともに、市民社会の多様な構成員が力を合わせることの重要性を強く訴えました。

（平和首長会議・2020ビジョン推進課）



サンタ・バーバラ市長（前列左）、現地NGO関係者との面会



被爆体験記

語り継ぎたい 「空白の十年」

本財団被爆体験証言者
清水 弘士

1945年8月6日

3歳の私は母とともに爆心地から1.6kmの吉島^{よしじまちょう}町の自宅で被爆しました。屋内だったので熱線の被害は避けられましたが、倒壊した家の下敷きになりました。母が必死に頭上の材木を押しつけ、屋根を突き破って脱出して私を引っ張り出してくれました。自宅のあたりは、それからすぐに火の海になりましたから、もう少し遅かったら私たちが生きていることはなかったでしょう。

父は爆心地から約1kmの広島市役所南隣の職場で被爆。吹き飛ばされ顔一面にガラスが突き刺さり、胸は血だらけになったそうです。炎に追われて市役所北側の公会堂前の池の水に入って避難しましたが、失神している間に同僚が千田町の赤十字病院（爆心地から1.5km）に運んでくれたようです。翌朝顔のガラスを抜いてもらい、^はこうようにして吉島町にたどり着き、お昼頃に母と再会できました。でもやっと家族と会えたのに、その後どんどん弱って行って10月8日に亡くなりました。なぜか、お腹全体が青黒く変色していました。それを見た母は「父ちゃんはピカのガスをたくさん吸ったからだ」と言っていました。父は近距離で強い放射線を浴びたので、内臓が破壊されて青黒く変色したのではないかと私は推測しています。

私自身も原爆から10年間、原爆症に苦しみました。最初はひどい下痢、その後はお腹の痛み、鼻血、ぶらぶら病^(*)などが続きました。小学校の体育の時間はずっと見学で、体の弱い子供でした。しかし中学校2年生になるとこれらの症状が消えて元気になり、進学して就職もできました。趣味を聞かれると「登山です!」と答えるくらいに体力がついたのです。

けれども40代半ば過ぎから次々と疾患が出てきました。今では腎臓と頸椎^{けいつい}に難病を抱え、心臓にも疾患があります。兄は入市被爆者で、若い頃にはとても元気でしたが、75歳で耳の奥の癌^{がん}を摘出して原爆症に認定されました。今年87歳で、肺癌も発症して闘病中です。何十年経ってからも肉体を壊し痛め続ける原子爆弾は、まさしく悪魔の兵器です。核兵器は一刻も早く地球上から根絶しなければならないと思います。

「空白の十年」

私は被爆者の「空白の十年」について究明し語り継ぐことを、生涯の課題にしています。広島と長崎の被爆者が、なんの支援もなく放り出された約十年間の苦しみのことを、「空白の十年」といいます。それは戦後7年間、日本を占領支配したアメリカ軍を中心とする占領軍（GHQ）が発令した“広島と長崎に関する報道を禁止する”「プレス・コード」によってもたらされました。これによって広島・長崎の惨状が秘密にされ、日本政府もこれに追随しました。このために被爆者は、国の内外から医療や生活の支援を受ける道を一切閉ざされてしまい、世間から放置されてしまったのです。この歴史は今では忘れられていますが、二度とあってはならない歴史的事実です。

私たち家族もその犠牲者でした。原爆で一切の家財と大黒柱の夫を失った母は、自分の力で私と兄を育てていかねばなりません。行商をやり、^{やみいち}闇市で瀬戸物^{やみいち}を売り、缶詰工場で日雇いで働いて、その日稼いだお金で食糧を買って私たちを養ってくれました。母自身も原爆症に苦しんでいたのに医者にもかかれず、必死で働きました。そうして貧しいながらも、なんとか人並みの生活ができるようになったのは、戦後5年以上経ってからのことです。被爆者は戦時中の苦しみ以上の厳しい生活が続いたのです。そのうえ何十年経ってからも原爆の後遺障害に苦しまなければならない。だから被爆者にとって戦争は死ぬまで終わらないのです。これが戦争なのだ、私はしっかりと語り継いでいきたい。そういう思いで証言に臨んでいます。



（米国戦略爆撃調査団 撮影）
広島駅前の闇市。屋台は畳2枚のスペース。
昼は瀬戸物^{やみいち}を売り、夜はそれを片づけて親子3人が抱き合って寝た。約1年ここで生活。

（*）ぶらぶら病—無気力となり、何もする気がおきない、疲れやすい状態となる、原因不明の症状・病。
原爆症の後障害のひとつ。

プロフィール

〔しみず ひろし〕

2011年の福島原子力発電所の爆発事故に衝撃を受けて被爆者団体で被爆体験の証言を始める。

2014年から2年間、広島県被爆協と日本被爆協の役員を務め被爆者運動を勉む。

1942年生まれ、77歳。

「広島・長崎講座」開設大学への支援

広島市と長崎市は、被爆の実相や被爆者のメッセージを若い世代に伝えるため、それらを学術的に整理・体系化し、学問として普遍性を持たせた「広島・長崎講座」の開設を働き掛けるとともに、その普及に取り組んでいます。

本財団は、平成31年3月から令和元年6月までの間、次の3大学が広島市で実施した平和学習に際し、プログラムの実施支援を行いました。

国際基督教大学

3月6日（水）及び7日（木）の2日間、米国に本部を置くロータリー財団により選拔され、同大学の修士課程で平和研究を専攻する留学生9人と教職員2人が広島市で平和学習を行いました。この取組による同大学の留学生の訪問は今回で17回目です。

一行は、平和記念公園や平和記念資料館の見学、小倉桂子さんによる被爆体験講話の聴講等を通して被爆の実相を学んだ他、特定非営利活動法人ANT-Hiroshimaの渡部朋子理事長、広島市立大学の湯浅正恵教授による講義の聴講なども行い、様々な角度から平和についての理解を深めました。

カールトン大学（米国）

5月9日（水）及び11日（金）の2日間、学生18人と教職員3人が同大学で4回目となる平和学習を広島市で行いました。平和記念公園や平和記念資料館の見学、小倉さんによる被爆体験講話の聴講を通して被爆の実相を学んだ他、広島市立大学広島平和研究所のロバート・ジェイコブズ教授の講義を聴講し、世界で行われている核実験についても学びました。

インディアナ大学・パデュー大学インディアナポリス校（米国）

6月10日（月）から12日（水）の3日間、学生6人と教職員2人が同大学で3回目となる平和学習を広島市で行いました。平和記念公園や平和記念資料館の見学、小倉さんによる被爆体験講話の聴講、被爆体験記朗読会の聴講などを通して、被爆の実相について学びました。



インディアナ大学・パデュー大学インディアナポリス校の被爆体験講話聴講の様子

（平和首長会議・2020ビジョン推進課）

「新着資料展」を開催しています

展示場所 平和記念資料館 東館地下1階 特別展示室
展示期間 平成31年3月29日（金）
 ～令和2年3月（予定）
展示資料 平成29年度に寄贈された被爆資料等230点

平和記念資料館では、原爆被害の実相を伝えるための貴重な資料として、被爆者やその遺族が保存されている被爆資料の収集・保管に努めています。平成29年度は、新たに61人の方から、784点の寄贈がありました。その一部を展示しています。

戦後74年が経過し、被爆資料や資料にまつわる詳細な情報の収集が次第に困難になっています。資料館では、核兵器廃絶のため、原爆がもたらしたさまざまな被害を将来にわたり伝えていきます。被爆資料の当館への寄贈について、ご協力いただきますようよろしくお願いいたします。



森脇瑤子さん(左、当時13歳)の救急袋

瑤子さんは建物疎開作業現場で被爆し、6日夜に死亡した。
 （寄贈 細川浩史氏）

【お問い合わせ】

平和記念資料館 学芸課

☎（082）241-4004

企画展「市民が描いた原爆の絵—記憶と向き合う」をNHK広島放送局と共催しています

展示場所 平和記念資料館 東館1階企画展示室
展示期間 平成31年4月25日（木）
 ～令和元年12月末（予定）
展示内容 市民が描いた原爆の絵 75点（複製パネル及び原画）、NHK広島放送局制作番組「原爆の絵が語るヒロシマ」10分版 リピート上映

「市民が描いた原爆の絵」は、当事者の脳裏に焼き付いた情景を本人が描き記した貴重な記録です。

収集のきっかけとなった最初の1枚が描かれてから45年、絵の作者は1,200人を、作品は5千点を超えました。その多くは、何十年も絵筆を握ったことのない人たちが身近な材料を使って描いた素朴な作品です。それでも、体験者ならではの生々しい描写が見る人の心を震わせます。

作者は、心の奥にしまい込んだ辛い記憶と向き合い、絵を描き上げました。よみがえる悲しみと悔恨、描き尽くせないもどかしさに苦しみながら、どうしても伝えなかったものとは、何なのでしょう。

【8K原爆の絵プロジェクト】

平成29年（2017年）、広島平和記念資料館はNHKと共同で「市民が描いた原爆の絵」4,200枚について、8Kカメラで撮影した超高精細画像データを作成しました。これにより、筆致や色使い、紙の質感まで鮮やかに再現することが可能となりました。

会場では、期間限定（5月2～6日、8月3～7日）で、「何かを言おうとしていた女性」
うえおかせんきち 上岡千吉 作
インタラクティブ8Kビューワーを体験していただきます。



【お問い合わせ】

平和記念資料館 学芸課

☎（０８２）２４１－４００４

「収蔵資料の紹介」コーナーで「ある一家の原爆」を開催しています

展示場所 平和記念資料館 東館1階企画展示室

展示期間 令和元年5月30日（木）

～令和元年12月（予定）

展示資料 手作りの人形など実物資料9点

「収蔵資料の紹介」コーナーでは、平和記念資料館で収蔵している約2万点の資料の中から、テーマに沿って数点ずつを展示しています。

1945年（昭和20年）8月6日、一発の原子爆弾により、広島のみちは一瞬にして廃墟と化しました。大量の放射線を浴び、体を焼かれ、多くの人々が苦しみながら亡くなりました。



◀「ある一家」木村家の兄妹
(左から、幹代さん、妙子さん、弟
を抱いた)一男さん)

▼幹代さんが授業で作った人形



遺族の名前は、松野(旧姓：木村)妙子さん。原爆で兄の一男さんと妹の幹代さんを亡くしました。妙子さんの脳裏には、2人への想いが刻まれています。

今回は、原爆で亡くなったある一家の兄妹に焦点を当て、兄妹が生前に使っていた遺品を遺族の言葉とともに紹介します。

【お問い合わせ】

平和記念資料館 学芸課

☎（０８２）２４１－４００４

資料展「広島市中島本町53番地 大正屋呉服店」を開催しています

平和記念資料館では、平和記念公園レストハウスの前身・大正屋呉服店が、90年前の3月20日に開店したことを記念して、この建物の被爆前の軌跡をたどる資料展を、平成31年3月20日から令和元年9月末（予定）まで当館東館地下1階で開催しています。

現在、耐震化等の改修工事中のレストハウスは、大ヒットしたアニメーション映画「この世界の片隅に」の冒頭に登場し、戦前の広島と今の広島をつなぐ存在として、改めて注目が集まっています。今まで広島では、大正屋呉服店は大阪に本店があったらしいと漠然と伝承されてきました。今回の資料展では、新たに確認された資料により、大正屋呉服店は、大阪・船場の呉服問屋「中谷伊助商店」が広島で始めた呉服小売業であったことが初めて確認されました。大正屋呉服店がモダンな鉄筋コンクリート造のビルに新築できたのは、船場の呉服問屋の資本力の賜物であったのです。

大正屋呉服店の新築から閉店、「燃料会館」となり被爆するまでの軌跡を、約60点の写真等で紹介しています。大正屋呉服店で働いていた方のご家族からご提供いただいた貴重な写真も含まれています。また、情報資料室内の展示ケースでは、戦争の激化により広島市内の呉服商組合が事実上解散する昭和18年末の複製資料をご覧ください。

来場者からは、「レストハウスの戦前の様子を初めて知りました」、「水洗トイレまである立派なビルだったとは知りませんでした」、「アニメ映画のファンで、主人公のすずさんがもたれかかっていたショーウィンドウの写真が見たくて来ました」等の感想が寄せられています。



1929年（昭和4年）3月に撮影された新築の大正屋呉服店（清水建設株式会社提供）

【お問い合わせ】

平和記念資料館 学芸課

☎（０８２）２４１－４００４

海外からの来訪者が 発信するメッセージ

～平和記念資料館芳名録より抜粋、日本語に訳したもの（仮訳）を掲載しています～

ヴァレリー・プラント／カナダ・ モントリオール市長

重要な訪問となりました。
平和へのメッセージです。
平和の重要性を思い出させて
くれた広島に感謝します。
(2018年6月4日)



ラウラ・エスキベル・モラ／駐 日コスタリカ共和国特命全権大 使

力を合わせて核兵器のない世
界を目指しましょう。
(2018年8月3日)

ウィリアム・ハガティ／駐日ア メリカ合衆国特命全権大使

広島平和記念資料館へ家族で
の訪問は心揺さぶられるもので
あり、次世代のために平和な世
界を築くことの大切さを再認識
するものとなりました。
(2018年8月7日)



ロベルト・アンブレロ・エスピノサ／チリ共和国外務 大臣



この記念館を訪ねると、
人は人類の破壊する力
を目の当たりにしますが、
人々の声を耳にし、広島
の鼓動を改めて知るとき、
築く力、愛する力、夢見
る力、許す力、そして伝
える力に感嘆します。そうして、このようなことが二
度と起きることのないようにというメッセージを持ち
帰ります。

チリそしてチリ政府は皆様と共にあります。
(2018年9月16日)

エマムアリ・ラフモン／タジキスタン共和国大統領

1945年8月6日という日は、人類にとって最も悲劇的
な日として、人類の歴史の一頁から決して消えないで
しょう。

この日、歴史上初めて、人類は日本国民を前にして、
大量破壊兵器の犠牲者となりました。

広島平和記念資料館は、
この最悪の悲劇及び決
して碎かれることのない
人々の魂を鮮烈に象徴す
る代表的存在です。

未曾有の罪深い行動の
結果、15万人の日本国民
が悲痛な思いをしながら命を落とし、15.4万人が被爆
者として苦しんできました。それにも拘わらず、この
広島平和記念資料館は、日出ずる国の人々の、平和を
愛し罪を赦せる心の象徴としてここに 있습니다。

私は、広島の犠牲者と友好的で平和を愛する日本国民に敬意を表します。

(2018年10月3日)



オーグスティン・フィリップ・マヒガ／タンザニア連 合共和国外務・東アフリカ協力大臣



広島と世界の皆様へ
私の人生において、こ
れほど生々しく、悲し
い場所を訪れたことはあ
りませんでした。平和記
念公園は、証言者として、
生きる記憶として、さら
には世界の平和のための教訓として役立っていくべき
です。核兵器の不拡散と廃絶のために使命感を持ち努
力していくことは、人類にとって最も重要なことです。
同時に、核兵器の恐怖から世界と後世の人々を守るた
めに、すべての国々と個人が担っていかなければなら
ないことなのです。世界平和のために、人類にとって
不可欠な核軍縮。その実現のため、私は今、より一層、
積極的に行動しています。

ヒロシマは、世界中の人々が核軍縮を支持し、その
活動に関わり続けていくために訪れるべき場所である
べきです。

(2018年10月8日)

カーリッド・アテフ・アブデルガッファール／エジプト・ アラブ共和国高等教育大臣、科学研究國務大臣

ヒロシマの平和へ

平和記念資料館は、広
島市民が75年前に被った
苦しみを二度と繰り返さ
ないよう人類へ証言する
存在だ、と私は考えてい
ます。そして、我々は皆、
人類の平和と安寧のために、核兵器廃絶を諦めること
なく訴えていかなければならないのです。

(2018年10月10日)



サウリウス・スクヴェルネリス／リトアニア共和国首 相

ヒロシマは人類への警鐘であり、文明にとっては歴史
の試金石です。ここ以上に、平和のメッセージが強



く響く場所があるでしょうか。我々は、後世の人々のために、地球が自己破壊するような事態を防がなければなりません。

ヒロシマを二度と繰り返すな！

(2018年10月11日)

カーク・コードウェル／アメリカ合衆国・ホノルル市長

広島の皆様へ

人と人の交流を通してこそ、広島とは別の、新たな原子爆弾投下を阻止することができます。ホノルルの私共は、平和、愛、そして賛同の意をもって、広島の皆様と共にあります。

(2018年10月29日)

ドン・マッティングリー／2018日米野球出場MLBオールスターチーム監督

我々は犠牲者のことを忘れません。野球を通じて得た友情を慈しみ、ともに平和を願います。

(2018年11月12日)



ヴァシレ・ブマコフ／駐日モルドバ共和国特命全権大使



ヒロシマの悲惨さを知ってはいましたが、平和記念資料館を訪れて、その悲劇の程度、核攻撃が引き起こした惨事、そしてあまりに多くの一般市民が亡くなったことを

理解することができました。資料館関係者の努力により、無数の人々が核兵器の恐ろしさについて学ぶことができ、世界の平和を守るために、あらゆる努力を惜しまないでいられるのです。

(2018年12月3日)

ヴィンセント・メリトン／セーシェル共和国副大統領

戦争の残虐性を伝え続けていただいていることに感謝します。

ヒロシマの悲劇を語り続けていかなければなりません。そうしなければ繰り返されてしまうからです。

(2018年12月3日)



ヘラルド・エルナンデス・ノルデロ／キューバ人民権力全国議会（国会）議員

この場所を訪ね、あの恐ろしい犯罪行為の結末を目の当たりにすることは感銘深いことです。



人類が決して忘れることのないようにと、皆様が行う活動の成果に感嘆の思いです。

ここに、広島の皆様に対するキューバ人民の敬意と愛情の念をお伝え致します次第です。

(2018年12月3日)

バシャーール・モハバット／駐日アフガニスタン・イスラム共和国特命全権大使

アフガニスタンイスラム共和国国民と政府を代表して、1945年8月6日に落とされた原爆の犠牲になられた方々とその近親者、そして広島市民の皆様にお悔やみ申し上げます。

私は心から、核兵器のない平和で幸福に満ちた世界になるよう願っています。

(2018年12月6日)



ピーター・ルイス／国際刑事裁判所（ICC）書記

我々は、戦争の非人道性が人間にもたらす過酷な結果を、決して忘れてはなりません。

(2019年1月24日)

パトリシア・フロア／駐日欧州連合代表部・駐日欧州連合特命全権大使

平和都市広島で今日、深い悲しみと共に、戦争の犠牲になった方々の想像を絶する苦しみと死を悼みながら、私はあらゆる人々に呼びかけ、平和と和解のために一丸となって努力していきたいと思っています。

(2019年1月28日)



ジャバロフ・ミカイル／アゼルバイジャン共和国国税大臣



1945年8月6日は、人類の歴史における最も恐ろしい日のひとつです。二度と繰り返してはなりません。

平和を祈り、日本と日本国民の繁栄を願います。

(2019年3月9日)

観光事業従事者研修会 「ヒロシマ・ガイド」を開催

本財団は、3月5日（火）に広島平和記念資料館及び平和記念公園で、研修会「ヒロシマ・ガイド」を開催しました。この研修会は、広島への来訪者に被爆の実相や核兵器廃絶と世界恒久平和の実現を願う「ヒロシマの心」を正しく伝えてもらうため、日頃から同館や同公園などを案内するバスガイドやタクシードライバー等観光事業従事者の方を対象に、平成13年度から開催しているもので、今回は24人の参加がありました。

まず、参加者はヒロシマ ピース ボランティアの案内で少人数のグループに分かれて公園を回り、慰霊碑等についての解説を受けました。

続いて、李鍾根氏による被爆体験講話を聴講した後、資料館職員からリニューアルオープン直前に控えた本館の改修工事の概要について説明を受けました。

終了後、参加者から「とても参考になった」、「最新の情報も聞けて良かった」などの感想が寄せられました。



李鍾根さんによる被爆体験講話の様子

（平和記念資料館 啓発課）

被爆体験証言者及び被爆体験 伝承者への委嘱書交付式の実施

本財団は、平成31年4月9日（火）、平和記念資料館メモリアルホールにおいて、平成31年度被爆体験証言者及び被爆体験伝承者への委嘱書交付式を実施しました。

被爆体験証言者は、修学旅行や平和学習で広島を訪れる団体などに対し、被爆体験や被爆の実相などを伝える被爆者の方々と、今年度の委嘱書交付式には37人のうち、34人の出席がありました。

また、被爆体験伝承者は、被爆者の被爆体験や平和への思いを受け継ぎ、将来にわたり伝えていく方々で、3年間の研修を修了し今年度から活動する15人を新たに加えた計131人のうち、84人



委嘱書交付式の様子

の出席がありました。

小溝泰義本財団理事長が出席者に委嘱書を交付した後、あいさつを行い、日ごろの活動に感謝の意を表し、「核兵器廃絶と世界恒久平和への思いを、これからも世界の多くの人々に訴え続けていただきたい」と述べました。

（平和記念資料館 啓発課）

被爆体験伝承者から

尾崎美栄子さん（平成27年度から活動）

私は長い間ヒロシマ ピース ボランティアとして活動をしており、ボランティア仲間から誘われて広島市の被爆体験伝承者養成講座に応募しました。講座では多くの被爆者の方の証言を聴き、その内容を約1万字の原稿に仕上げていきました。これは私には大変なことでした。

私は新宅勝文さんの被爆体験を伝承しています。新宅さんは被爆当時19歳で、

当時の広島大学のグラウンド（中区千田町）から臨時の救護所があった御幸橋までケガやヤケドをした人たちを運んだり、グラウンドで被爆した人たちにお水をあげたり、極限の状況の中で自分ができることを考え、精一杯行動されました。さらに被爆翌日にはお姉さんをさがして市内中心部に入られたので、新宅さんの証言を聴くと被爆当日、翌日の市内の状況がよくわかります。

私は小学校で講話を行うことが多いのですが、生徒たちは本当に純粋です。私の話を聴いて書いてくれた感想文などを読むたび、「この気持ちを忘れずに大人になってね。こんな子供たちがいる限り将来は大丈夫。」と思います。

しかし、子供たちにこんなに心配をかけるような兵器を作ったのは誰でしょう？ 何かの誤作動で世界を滅ぼすかもしれないような兵器を作ったのは誰なのでしょう？「戦争をしてはいけない」と言いながら高価な軍艦を買うのは誰なのでしょう？ 国民が選んだ代表者である政治家は、一般国民が、特に幼い子供が、本当に安心して暮らせるように、世界のかじ取りをしてほしいと思います。海外旅行をすると感じることは、世界のほとんどは善良な市民で成り立っているということです。日本の政治家には、唯一の戦争被爆国の代表として、もっともっと平和外交に努めてほしいと思います。

定時開催の講話では、来場者の方に熱心に聴いていただけたら嬉しいのですが、聴いたことをどのように



英語で講話を行う尾崎さん

自分たちの生活に持ち帰っておられるのかは分かりません。私の願いが伝わっていただければいいと思います。私は日本語と英語で講話を行っており、来場者が少ない場合は講話を始める前に声かけをします。外国人の方は素直に入場してくださるのですが、日本人の方には断られることが多いのが現状です。私は、日本人の方にこそ、広島をの惨劇を知っていただき、考えていただきたいと思っています。唯一の戦争被爆国の国民として、私たちこそ、もっと平和推進活動を積極的にやらなければならないと思うのです。

古賀^{こが}侑子^{しこ}さん（平成27年度から活動）

私は1945年生まれで、生まれた年の8月6日に広島市内で被爆しました。赤ちゃんでしたから被爆の記憶はありませんが、私の母を含め、沢山の人が悲しい、苦しい体験をしています。その生々しい、恐ろしい話や苦労した話を家族が話しているのを、私は涙の出る思いで聞いて育ちました。

段々と被爆者も減少していく中で、悲惨な原爆の歴史を風化させてはならないとの思いがあり、定年退職後、被爆体験伝承者の募集があった際に応募しました。

私は岡田恵美子さんの被爆体験を伝承しています。伝承講話の内容は、①原爆の被害の実相、②岡田さんの被爆体験、③私の被爆体験、④私からのお願い、の順に進めています。

岡田さんは8歳の時、爆心地から2.8kmの自宅で被爆しました。12歳のお姉さんは当日の朝、建物疎開作業に元気よく出て行ったまま帰って来ず、犠牲になりました。庭に出て飛行機に手を振っていた弟さんは大やけどを負い、お母さんはガラスの破片が体中に刺さって大けがをしながらも、弟さんと恵美子さんを連れて広島駅の北にあった東練兵場へ避難しました。その時の余りにも悲惨な地獄の光景を講話で語ります。岡田さんは、「今でも赤く染まった夕焼けを見ると、あの時の事を思い出すので、夕焼けは嫌いです。」と言われます。また講話では、広島駅周辺などに2,000人から6,500人の原爆孤児がいたこと、原爆は未来のある大事な子ども達の人生を大きく変えたという事実を語ります。岡田さん自身も、放射線の影響で再生不良性貧血になったのです。

私の被爆体験は、庭で乳母車に寝かされていた時、ものすごく強烈な爆風で遠くまで吹き飛ばされ、奇跡的に助かった体験です。母が守ってくれたおかげで今の自分があるのだと感謝しています。私は3年前、乳癌^{がん}を患いましたが、体調は回復しています。

最後に、私からのお願いを話して講話を終わります。

昨年より県外の学校への派遣も増えました。講話の導入部分では、以前保育士として働いていた時に培った、人形を使った腹話術を取り入れるなどの工夫をして、内容的に子どもに分かりやすいような話し方をしています。また、45分間の時間内で講話を終えるよう

心がけています。伝承者としての初年度だった平成27年度には、広島をの被爆地図一枚を掲示して講話を行っていましたが、今は、原爆の被害の実相などをプレゼンテーションソフトを使用して説明しており、「原爆の悲惨さがよく分かります」などの感想文もいただいています。反省点もありますが、今後の私の勉強にもなっています。

被爆体験証言者の岡田恵美子さんの“二度と広島のような恐ろしい体験を繰り返してはならない”という思いと、“平和のために自分ができる行動を起こして欲しい”という思いを伝えていく事が、伝承者の使命と思っています。核兵器を造り出したのが人間であるなら、平和を守っていくのも人間です。

同じ内容の講話を行っても、その都度、聞く人の反応に多少の差があります。人の心に響くよう、一回一回心をこめて話すよう努力しています。年を重ねても元気で伝承者の活動が続けられるよう、頑張っていきたいと思っています。



腹話術を取り入れて講話を行う古賀さん

被爆体験記の朗読会にご参加ください

被爆者やその家族が記した体験記には、被爆者一人ひとりそれぞれの真実や心情が記されています。

原爆死没者追悼平和祈念館では、これら被爆体験記や原爆詩を読み語ることによって、幅広い人々と被爆者の記憶や思いを共有し、次の世代へ継承していくため、「被爆体験記朗読会」を開催しています。

朗読会では、被爆体験記朗読ボランティアが被爆体験記や原爆詩の朗読を行った後、参加者も原爆詩を朗読します。情景を思い描きながら朗読を聴き、また自ら声を出して読むことにより、被爆者の思いを共有し、追体験することができます。

修学旅行や平和学習で平和記念公園を訪れる小・中学生、高校生を対象に、祈念館のみならず、広島市内及び近郊の学校や公民館などでも開催することができます。平成30年度からは全国の小・中学校、高等学校、自治体、その他の団体が行う平



多くの人が参加する8月6日の朗読会

和学习の場に、朗読ボランティアを無料で派遣しています。また、海外からの来館者を対象に英語朗読会やだれでも自由に参加できる定期朗読会も開催しています。

今年も8月5日と6日に、平和記念公園を訪れる多くの方々のために臨時で朗読会を行います。お気軽にご参加ください。

《8月5日》 ①10:00～、②14:00～（英語）、
③15:30～、④17:00～（各40分）
《8月6日》 ①9:30～、②11:00～、
③14:00～（英語）、④15:30～、
⑤17:00～（各40分）

（場所：追悼平和祈念館地下1階研修室）

朗読会に参加した方々からは、「原爆の悲惨さや平和の尊さを家族に伝えたい。」「情景を想像しながら聴くことができ、胸に響いた。涙が出た。」などの感想が多数寄せられています。

【お問い合わせ】

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館

☎（082）207-1202

被爆体験記を多言語に 翻訳、公開しています

原爆死没者追悼平和祈念館への海外からの来館者が、年々増加しており、全入館者のおよそ4割になります。被爆体験記を母国語で読むことによって、より多くの国の方々に原爆被害の実相について一層理解を深めてもらうため、被爆体験記の多言語化に取り組んでいます。

平成21年度から被爆体験記の翻訳に取り組み、初年度は10言語に、平成30年度末時点では24言語に翻訳しています。

平成30年度は、4編をヘブライ語に翻訳し、展示内容の充実を図りました。

翻訳した体験記は、体験記閲覧室の外国語コーナーで閲覧でき、収蔵資料

検索装置では、日本語のほか、英語、中国語、韓国・朝鮮語の3言語で閲覧できます。

また、当館のホーム・ページ（<http://www.hiro-tsuitokinenkan.go.jp/>）でも、日本語の他24言語で被爆体験記を公開しています。



ヘブライ語に翻訳された被爆体験記

【閲覧できる24言語】

英語、中国語、韓国・朝鮮語、アラビア語、イタリア語、インドネシア語、ウルドゥー語、オランダ語、ギリシャ語、スウェーデン語、スペイン語、タイ語、ドイツ語、ノルウェー語、ヒンディー語、フィリピン語、フィンランド語、フランス語、ヘブライ語、ベトナム語、ポーランド語、ポルトガル語、マレー語、ロシア語

（原爆死没者追悼平和祈念館）

被爆資料、原爆死没者のお名前・遺影（写真）、被爆体験記募集 被爆体験の継承にご協力を

広島平和記念資料館では原爆被害の実相を伝えるため、被爆者の方のご遺品や被爆の痕跡をとどめる資料、写真等の収集・保管に努めていますが、戦後70年以上が経過し、遺品や資料にまつわる詳しい情報の収集が次第に難しくなっています。

もしご家庭で後世に残すべき被爆者の方のご遺品や原爆被害が伝わる資料をお持ちでしたら、ぜひ当館にご寄贈ください。ご寄贈いただきました資料は当館で大切に保管し、原爆の悲惨さを伝えるために活用いたします。

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館では、原爆死没者のお名前と遺影（写真）、被爆体験記を収集・公開し、被爆者の「こころとことば」によって、原爆被害の実相を伝え、平和を訴えています。

原爆死没者が平成30年8月6日現在で31万4118人であることに對し、当館に原爆死没者のお名前と遺影（写真）をお寄せいただいている数は、平成30年度末で、2万3020人とどまっています。原爆で多くの人が亡くなった事実を伝えるため、ご協力をお願いいたします。

また、被爆体験記とは、ご本人が自身について執筆されたもののみならず、広島と長崎の被爆者の方が書かれた被爆体験に関する手記・日記・書簡、被爆者の遺族・友人が書かれた追悼記を含みます。

お寄せいただいたお名前と遺影（写真）、被爆体験記等は永久保存するとともに、当館で公開し、後世に伝えさせていただきます。



国立広島原爆死没者追悼平和祈念館の体験記閲覧室

【お問い合わせ】

■被爆資料について—広島平和記念資料館 学芸課まで

☎（082）241-4004

■お名前・遺影、体験記について—国立広島原爆死没者追悼平和祈念館まで

☎（082）543-6271

外国人市民の日本語能力向上支援

地域日本語教室のボランティア同士の連携を深めスキルアップを図るための講座と、各教室が抱える課題の一つであるボランティア不足を解消するためのボランティア養成講座を開催しました。

①日本語ボランティアスキルアップ講座（全2回）

第1回（1月26日（土））は、特定非営利活動法人安芸高田市国際交流会理事／事務局長の明木一悦^{あき たかた}さんを講師にお迎えし、災害時の外国人支援について、安芸高田市における具体的な取組や他都市での事例紹介をもとに、どのような支援が外国人にとって必要であるかを学びました。

ワークショップでは、昨年7月の西日本豪雨災害時の行動を振り返りながら、日本語教室ではどのような対策や支援ができるのかについて話し合いました。



明木一悦講師のワークショップの様子

第2回（1月29日（火））は、広島大学大学院教育学研究科の渡部倫子^{わたなべ ともこ}さんを講師にお迎えし、日本語評価について、テストがどのような役割を持つのか、グループに分かれて意見交換しながら、テスト本来の目的や評価の方法等について学びました。日本語を評価することによって、より良い日本語教室活動や日本語学習支援に生かしていくヒントを得ながら、具体的な活動について考えました。

第1回・第2回合わせて54人が参加し、アンケート調査では、「今後の活動の参考になった」「いろいろな意見が聞けてよかった」など、満足したとの回答が多く寄せられました。

②日本語ボランティア養成講座（上期・下期全5回づつ）

回	日時	内容
第1回	上期 平成30年 8月18日（土）	外国人市民について、どのような人がどのように日本語を学んでいるかを学び、また、日本語ボランティアを始めるに当たって必要なことや、やさしい日本語も学びました。
	下期 平成31年 2月12日（火）	
第2回	上期 平成30年 8月25日（土）	国語と日本語の違い、日本語で日本語を教えること、日本語文法の基礎について重点的に学びました。
	下期 平成31年 2月19日（火）	

第3回	上期	平成30年 9月1日（土）	日本語の教え方について、例文を用いて学びました。
	下期	平成31年 2月26日（火）	
第4回	上期	平成30年 9月1日（土）	広島市内で活動している日本語教室の紹介と交流会を行い、意見交換をしました。
	下期	平成31年 2月26日（火）	
第5回	上期	平成31年 2月9日（土）	これまでの復習を行い、また、ボランティア教室での悩みや疑問を解消するため、グループワークを実施しながら学びました。
	下期	令和元年 8月開催予定	

講座は、上期・下期合わせて定員を超える88人もの受講者で会場が満席となりました。講座終了後、日本語ボランティア活動をしたいと、受講者全員が活動への関心を高めていました。



第1回のワークショップの様子

③平成31年度日本語ボランティア養成講座

本年度は、内容を拡充し、令和元年8月20日（火）から全10回の講座を開催します。対象者は主にこれからボランティア活動を始めようと考えている人です。募集内容は『ひろしま市民と市政』8月1日号に掲載しています。多数の応募をお待ちしています。

（国際交流・協力課）

「通訳ボランティア研修会」の開催

当財団では、日本語での会話が困難な外国人市民を支援するため、通訳ボランティアを登録し、行政機関の窓口や学校等に派遣しています。

この通訳ボランティアを対象に、多文化共生の知識や語学能力の向上等を目的とした研修会を、全3回開催しました。

第1回目、2月23日（土）に



参加者による意見交換

は、広島市人権啓発課の職員が外国人市民を取り巻く現状や課題、広島市の多文化共生の取組について、当財団職員が通訳ボランティア派遣制度の概略について説明しました。続いて、平成30年度の活動経験者3人が、自身の活動体験などを発表しました。

第2回目、3月2日（土）には、地域国際化推進アドバイザーでRASCコミュニティ通訳支援センターの西村明夫代表に、出入国管理及び難民認定法の改正に伴う在留外国人を取りまく環境の変化や、コミュニティ通訳として必要な心構えについて講義していただきました。

第3回目、3月9日（土）には、プロの通訳者を講師に招き、英語と中国語のグループに分かれ、語学習得の有効な方法、ロールプレイングなどの語学研修を行いました。

全3回の研修会には延べ104人が参加し、「外国人市民の増加状況がよく分かった。」「在留資格、技能実習制度の解説が参考になった。」などの感想が寄せられ、今後の活動に役立つ研修会となりました。

（国際交流・協力課）

JICAサロン 「ネパールってどんな国？ ～青年海外協力隊が語る派遣国の魅力～」

3月10日（日）、広島国際会議場の国際交流ラウンジを会場に、JICA中国（（独）国際協力機構中国センター）との共催で、平成30年度第4回JICAサロン「ネパールってどんな国？～青年海外協力隊が語る派遣国の魅力～」を開催しました。

今回は2016年から2年間、「土壌肥料」という職種でネパールに滞在し、農業指導を行った原田浩司さんにお話を伺いました。政治、経済、宗教、地理などネパールの基本情報から、人々の日常生活の様子、ネパールが現在抱える課題に至るまで、原田さんが実際に見て感じたことを、写真や動画を交えながら幅広く話してくださいました。ネパールの人は踊り好きな人が多く、踊りの様子を撮影した動画からは、その場の楽しそうな雰囲気が伝わってきました。また、市場での買い物などがまだ一般的ですが、都市部にはスーパーマーケットができるなど、人々の暮らしにも徐々に変化の波が押し寄せていることもわかりました。

2015年にはネパールで大地震が発生しましたが、その爪跡が当時のまま、手



講師の原田さん。ネパールの魅力をわかりやすく丁寧に話してくれました。

付かずで残る村を撮影した動画を通して、復興が立ち遅れている現状について学びました。

今回、原田さんのお話を伺い、ネパールの「今」を知ることができました。と同時に、ネパールの奥深い魅力にも触れることができ、有意義な時間となりました。

（国際交流・協力課）

今年度のひろしま奨学金 奨学生30人が決定しました

本財団では、市内の大学または大学院に在籍する私費留学生30人に対し、「ひろしま奨学金」として毎月3万円を1年間支給しています。

6月27日（木）に開催した奨学生決定書交付式及び交流会では、「ひろしま留学生基金」に多額のご寄附を頂いている方々や選考委員の皆様にもご出席いただき、奨学生たちは広島での生活や今後の抱負などの話に花を咲かせ、多くの方々との交流も深まり、大変有意義な時間となりました。



決定書交付式の様子

この「ひろしま奨学金」制度は、昭和63年から始まり、皆様から寄せられた寄附金により運営しています。しかし、昨今の金利低下により、財源は大変厳しい状態となっています。「ひろしま留学生基金」への皆様の温かいご支援をお待ちしております。

【平成30年度にご寄附いただいたみなさま（敬称略・順不同）】

国際ソロプチミスト広島（31年継続）、一般財団法人多山報恩会（25年継続）、ぱれっと倶楽部（16年継続）、公益社団法人日本産業退職者協会広島支部（14年継続）、橋本真知子（9年継続）、ほか匿名2人

ひろしま留学生基金へのご寄附に関するお問い合わせは

（公財）広島平和文化センター 国際部国際交流・協力課
☎730-0811

広島市中区中島町1番5号（広島国際会議場3階）

☎（082）242-8879

「姉妹・友好都市の日」記念イベント 姉妹・友好都市を市民に紹介

広島市は、海外に6つある姉妹・友好都市ごとに「姉妹・友好都市の日」を設けて記念イベントを開催しています。イベントの進行役は公募等で選ばれたヒロシマ・メッセンジャーが務めました。

大邸の日

5月3日（金・祝）から5日（日）まで、ひろしまフラワーフェスティバル会場で「大邸の日」記念イベントを開催しました。主催—平成31年度大邸の日実行委員会（全12団体）

3日の記念セレモニーでは、大邸の日実行委員会委員長ほか関係者の挨拶と、大邸広域市長から届いたメッセージを紹介しました。

その後のアトラクションでは、エリザベト音楽大学の韓国人留学生2人、日本人学生5人で編成した管楽器アンサンブルの演奏と、同アンサンブルと山陽女学園管弦楽部の共同演奏を披露しました。

また、三日間を通じて開設した「韓国・大邸マダン（ひろば）」では、「韓服（チマチョゴリ）体験コーナー」などが家族連れや若い女性を中心に多くの方で賑わい、韓国の文化に触れることができました。

5日には、例年人気の高い「韓国家庭料理の販売」で、大邸広域市から派遣された3人の料理人が調理した2品のメニューを販売しました。日本でよく知られた辛味の強い韓国料理とは違う、やさしい味わいの料理で、来場者はその新鮮さを楽しんでいます。



大邸料理人の調理の様子

期間中、約4千人余りの来場者があり、催しは大変盛況のうちに終わりました。

ハノーバーの日&似島でドイツ体験

第一次世界大戦中に似島のドイツ人俘虜によって日本に初めてドイツ菓子“ハウムクーヘン”が伝えられたこと、また、似島のドイツ人俘虜と広島市の学生チームが日本初と言えるサッカーの国際親善試合を広島市で行って100年という節目の年にちなみ、6月2日（日）に似島の似島公民館とその周辺で、「ハノーバーの日」記念イベントおよびドイツ関連事業を開催しました。主催—平成31年度ハノーバーの日実行委員会（広島ハノーバー友好協会や本財団など13団体で構成）、広島市、似島公民館

例年「ハノーバーの日」で行ってきたドイツパンと

ソーセージ、バウムクーヘンの試食、茶道体験、ルッチェラーゲ（2つのグラスを使ったぐいのみ大会）、ドイツ絵本の展示と読み聞かせ、ハノーバー電車のペーパークラフト体験などのほか、新たに、合唱団や広島交響楽団首席チェリストによる演奏、サンフレッチェ広島によるサッカー教室、バウムクーヘン手作り体験、似島の歴史講演会、似島の郷土料理・たこ飯の試食など、多彩なプログラムを企画しました。

約650人の参加者があり、多くの人が似島を訪れ、様々な体験や食を通して似島とドイツ、ハノーバーの歴史について触れ、1日を楽しく過ごしていました。



ジャーマンソーセージの販売



マーティン・スタンツェライトさんによるミュージック&トークイベント

（国際交流・協力課）

広島市外国人市民の生活相談コーナー —相談窓口の拡充—

「外国人市民の生活相談コーナー」では、今年4月から、スペイン語とポルトガル語の相談窓口を、週3日から週5日に増やしました。

相談日の拡充により、月曜日から金曜日の週5日、中国語とスペイン語、ポルトガル語の3か国語に対応できる相談員が、行政機関への各種届出や困りごとの相談に応じます。また、9月頃から週2日、ベトナム語の相談日も加わる予定です。

【連絡先】

☎（082）241-5010

E-mail：soudan@pcf.city.hiroshima.jp

【場所】

広島国際会議場1階 国際交流ラウンジ内

【時間】

月曜日～金曜日の午前9時～午後4時

【対応言語】

中国語、スペイン語、ポルトガル語 ほか

【休室日】

祝日、8月6日、12月29日～1月3日



“平和について思う”

ひろしま日本語教室と 国際交流

ひろしま日本語教室 代表

みつはら すずえ
光原 鈴江

ひろしま日本語教室は、1987年11月に広島市で初めてのボランティア教室として、有志が集まり草の根の活動で立ち上げられました。そして半年間の準備期間を経て、1988年4月から本格的に教室がスタートしました。その後30年以上に渡り、広島在住外国人の日本語学習を支援するとともに、市民との交流の場や、外国人への情報提供や居場所づくりを目指してきました。

発足当時、学習者は中国から帰国した残留邦人とその家族、日本人と結婚した配偶者、留学生とその家族、在日韓国人配偶者などで、毎週土曜日の午前中は広島商工会議所の一室を、夜はマツダのふれあい会館をお借りして教室を開いていました。その後、中央公民館へ、そしてクリスタルプラザと広島平和文化センターへと会場を移しながら、アジア大会、ペアセロベ（国際交流フェスティバル）をはじめとする様々な国際交流イベント、世界各国からの訪問団やユニタール広島（UNITAR：国連訓練調査研究所）への協力など、多くの活動をしてきました。

教室での学習は、挨拶、ひらがなを覚えることから始め、日本語の文法や会話を学んでいきますが、それに加えて、日本の社会に適應できるように、買い物の仕方、ゴミの捨て方、病院や銀行での対応など、生活全般に渡る支援も必要でした。

日本の経済成長とともに外国からの労働者や研修生なども増え、日本語教室の需要は高まりましたが、バブル崩壊やリーマンショックなどで経済が低迷すると、外国人労働者のリストラや帰国が相次ぎ、私たちの教室もその影響を大きく受けながら、今日まで活動を続けてきました。

現在の学習者は、従来に加え、ビジネスマンとその家族、研修生、技能実習生、英語教師、短期滞在者（観光や文化活動等）など、来日された目的も様々です。そして教室での活動も、日本語学習だけでなく、お花見やお祭りといった四季の行事や、広島城、縮景園、二葉の里など地域の散策、お好み焼きを自分で作る体験、日本文化体験（書道、折り紙、茶道、華道、着付け）など様々な活動に広がり、これらを通して交流を図っています。

また、日常生活での安全を守るため、地震や災害から身を守るための防災訓練や、事故・事件に遭わないための安全教室を、消防署や警察の協力を得て行って

います。

来日当初全く日本語が話せず、不安そうな顔で教室に来られた方が、徐々に会話ができるようになった時の笑顔を見たり、「教室のおかげで、

困ったときに助けてもらってとても嬉しかった。」という感謝の声を聞いたりすると、地道に活動が続けてきて本当に良かったと思います。また、帰国された方とボランティアがメールやSNSでの交流を続け、再来日されたときに再会し、楽しいひと時を過ごすこともあります。

一人の外国人には、母国に多くの家族、親せき、友人などがいます。学習者が母国の人たちに日本での生活を語ることで、その人たちにも日本という国を理解してもらい、好きになってもらうことは、世界平和につながる小さな一歩になると考えています。

2019年4月より、在留資格「特定技能」に係る制度が開始され、私たちの教室にも多くの技能実習生が参加されるようになりました。

私たちの教室はボランティアの善意だけで成り立っており、会場の安定した確保、運営費やボランティアの確保が困難です。また、学習支援を必要とする子どもたちの問題など、多くの問題を抱えています。ボランティアの努力だけでは限界が来ていると思います。今後は行政と協力しながら、日本人にとっても外国人にとっても、住みやすい町にしていかなければなりません。

広島に来られる外国人は、今後ますます増えると思いますが、「国際平和都市広島」の名に恥じない、皆さんに喜んでいただける日本語教室を継続していきたいと思っています。

これからも、多様に変化する国際情勢のなかで、私たちボランティアが「小さな町の外交官」として世界の人たちと交流を持ち続け、微力ながらも「世界平和」の一端を担うことができたらと願っています。

今後とも、地域日本語ボランティア教室へのご理解とご協力を、よろしくお願い致します。



あきたくらかけ
6月29日（土）、安佐北区倉掛の総合防災センターで体験学習。
地震時の対応や火災時の消火方法、煙の中を逃げる体験をして、大変役立ったと好評でした。

ひろしま日本語教室

2016年2月 広島ユネスコ協会より「活動奨励賞」受賞

2019年2月 ヒロシマ平和創造基金より「国際交流奨励賞」受賞

2019年4月 広島市より「広島市政功労賞」受賞